

## 生きるということ

げんだい せいねん じぶん じしん いしき ちょうさ み  
現代の青年が自分自身をどう意識しているかという調査を見ていると、たいへん印象的なことがあります。それは、「憧れる」とか「思い悩む」といったような項目が、男女の区別をこえて、とびぬけて高い回答としてあがっていることです。

じだい せいねん ききょうつう しんり よ  
ここには、時代のちがいをこえて、青年期共通の心理を、よく読みとることができるのではないのでしょうか。つまり、現実の自己から理想の自己に高まりたいという思い、あるいは自分自身のところを深く見つめたいという内面化への欲求といってよいものです。こうした心理は、むかしから青年に特有のものとして指摘されてきましたが、今日でも変わっていないようにおもわれます。

かんれん ひごろ わか ひと せつ き  
それと関連して、日頃、若い人たちと接してよく気づかされる、いま一つのことがあります。若い人たちは、自分はどうも他人から正しく理解されていらないという悩み、いらだたしさをもっているのではないのでしょうか。現に他人から見られている自分の姿は、じつはほんとうの自分の姿ではないのだ、という思いなのです。ここには、若い人たちが一人ひとり、自分とは他人とちがった存在であり、独自の自己をもった人間なのだ。そうでありたいと願っている、切実な気持ちがみられます。そのことは、若い人たちが自分

自身じしんにたいする関心かんしん、「私わたしはいつたい何なにものなのか」という問いを、いまも  
もちつづけていることあらの表われではないでしょうか。このように自己じこにたい  
する問いに目覚めるといことは、自分じぶんのこころの世界せかいに目覚める第一歩めざ だいいっぽだ  
と思おもいます。

ところで、このこころというものについて、おそらくきみたちも、漠然ぼくぜんと、  
こんなふうかんがに考かんがえているのではないのでしょうか。つまり、こころというもの  
は、私わたしたちが生まれ落ちると同時おに自然どうじに身しに備そなわっているものだ、と。  
このように考かんがえている人ひとは、意外いがいに多いおおのではないかと思おもいます。しかし、  
これは、まったくのまちがいなのです。人間にんげんてき的な感動かんとくとか、こころの世界せかいに  
たいする感受性かんじゅせいといったようなものは、つね日頃ひごろから私わたしたちが養やしない育そだて  
ていかないと、身みにつかないものなのです。

それは、ちょうど私わたしたちが大学だいがくに入はいって専門せんもんの勉強べんきょうをするのと同じで  
す。たとえば法学部ほうがくぶの学生がくせいであれば、法律学ほうりつがくというものの基本きほんてき的な概念がいねんか  
ら勉強べんきょうを始はじめて。四年間よねんかんかけて、ようやく法律ほうりつの体系たいけいとはどういもの  
かという専門せんもんの知識ちしきを身みにつけるわけです。これに反はんして、こころの世界せかいに  
ついては、みんな意外いがいと安易あんいに考かんがえているようです。そんな特別とくべつの勉強べんきょうな  
どなしにでも、生まれながらに身みについていると思おもっています。しかし、け  
っしてそうではありません。私わたしは三〇年間さんじゅうねんかん、大学だいがくで若い人わかたちと多くおほの

であ <sup>かさ</sup> 重ねてきました。そうしたなかで、<sup>そだ</sup> ころを<sup>くんれん</sup> 育てるといふ訓練をい  
ままでしてこなかった<sup>わか</sup> 若い<sup>ひと</sup> 人が、<sup>ふ</sup> だんだん<sup>き</sup> 増えてきていることに<sup>き</sup> 気づかされ  
ています。そういう<sup>ひと</sup> 人は、ほんとうの<sup>いみ</sup> 意味で、<sup>いみ</sup> ころをもっていないのです。

<sup>ひと</sup> ころをもっていない<sup>おどろ</sup> 人がいるといふことは **驚** くべきことです。あまり  
<sup>だいたん</sup> 大胆なことをいふとあちこちに<sup>い</sup> 差し<sup>さ</sup> 障りが<sup>さわ</sup> できそうですが、<sup>だいがくにゆうし</sup> 大学入試の  
<sup>むづか</sup> 難しい<sup>がくぶ</sup> 学部の<sup>がくせい</sup> 学生ほど、<sup>そだ</sup> ころが<sup>かん</sup> 育っていない<sup>じゆけんべんきよう</sup> 感じがします。受験勉強  
<sup>お</sup> に<sup>せかい</sup> 追われて、<sup>あら</sup> ころの<sup>あら</sup> 世界をかえりみるゆとりの<sup>あら</sup> なかったことの<sup>あら</sup> 表われなの  
でしょうか。そのような<sup>いみ</sup> 意味で、<sup>そだ</sup> ころといふものは<sup>そだ</sup> 育てるものなのだとい  
うことを<sup>さいしょ</sup> 最初にお<sup>はなし</sup> 話しておきたいと思ひます。私<sup>おも</sup> たちは、<sup>わたし</sup> 日頃<sup>ひごろ</sup> から、<sup>じぶん</sup> 自分  
の<sup>はたけ</sup> ころの<sup>たがや</sup> 畑を<sup>みず</sup> 耕して、<sup>そそ</sup> たえず<sup>ひりょう</sup> 水を<sup>ゆた</sup> 注ぎ、<sup>と</sup> 肥料を<sup>と</sup> ほどこして、<sup>と</sup> 豊かな<sup>と</sup> 土  
<sup>ち</sup> 地にかえていかななくてはならないのです。

みやたみつお  
宮田光男